４月から７月までは、東京大学大学院総合文化研究科言語情報専攻において私学研修員として、寺澤盾教授の大学院の「言語科学基礎理論演習」の授業に毎週出席し、中英語韻文の詩である Pearl の講読をしつつ、14 世紀の英詩における動詞句を分析する研究を行った。また、日本中世英語英文学会で行っている「日本において中世英語英文学研究を担ったパイオニアたち―略歴、業績、評価―」という事業に協力するよう要請を受けたため、寺澤教授と共著で元東京大学名誉教授の中島文雄氏の業績を紹介する記事を執筆した。

動詞を含む節の史的変化の研究として、後期近代英語期に書かれたジェイン・オースティンの小説における'I think', 'I suppose'などの評言節(comment clause)の研究をまとめ、６月２３日に近代英語協会大会において「Jane Austen の英語における comment clause について」という研究発表を行った。この発表では、Pride and Prejudice（高慢と偏見）という小説を取り上げ、会話部分において評言節の使用頻度や使用されている表現節の種類が男女によって異なることを示し、さらに登場人物の性格づけに大いに関わっていることを明らかにした。登場人物たちは、日本語では訳出が難しい評言節をうまく使い分けることによって、登場人物の丁寧さなどの主観的な態度を表し、対人関係の管理を巧みに行っていることがわかった。

９月１日に渡加し、バンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学の英文科の Visiting Professor となった。招聘責任者であり歴史語用論の権威である Laurel Brinton 教授に、Jane Austen の英語における comment clause に関する論考についてコメントをいただくことができた。それを参考にしながら、個々の評言節についてさらに詳しく調査をすすめ、テキスト内の例文の解釈について再考するなど研究の精度を高めるとともに、あらたな拡張性がおおいにあることを確認できた。１１月には Stefan Dollinger 准教授の辞書学のセミナーにおいて、句動詞の発達の初期近代英語期から後期近代英語期にかけて次々と出版された辞書の記述を参考にして、句動詞がどのように認識されていたのかについて研究を行い、１８世紀の辞書編集者にとって句動詞は十分に扱うことが難しい要素であることをあきらかにした。本調査では、ブリティッシュ・コロンビア大学図書館の稀覯本を活用した。また、Brinton 教授のコーパス言語学や英語史の授業、Stefan Dollinger 准教授の辞書学の授業を参観し、教材の用意の仕方やセミナーの運営方法などを学ぶことができた。

以上